

学位論文要約

日本語における否定のアスペクト形式の研究

広島大学大学院人間社会科学研究科
教育科学専攻 日本語教育学プログラム

学生番号 D215346 氏名 道法 愛

I. 論文題目

日本語における否定のアスペクト形式の研究

II. 論文構成（目次）

第1章 序論

- 1.1 問題の所在
- 1.2 本研究の目的
- 1.3 完了・未完了の定義について
- 1.4 本研究の構成

第2章 先行研究

- 2.1 日本語のテンス・アスペクト体系
- 2.2 アスペクトに関する研究
 - 2.2.1 日本語のアスペクト体系
 - 2.2.1.1 継続相（シテイル・シテイタ）のアスペクト的意味
 - 2.2.1.2 完成相（スル・シタ）のアスペクト的意味
 - 2.2.1.3 アスペクト的意味の関係について
 - 2.2.2 Perfective について
 - 2.2.3 アスペクト研究における本研究の位置づけ
- 2.3 否定に関する研究
 - 2.3.1 使用頻度の違いに関わるもの
 - 2.3.2 意味の非対称性に関わるもの
 - 2.3.2.1 否定文一般に関するもの
 - 2.3.2.2 アスペクトに関するもの
 - 2.3.3 否定研究における本研究の位置づけ
- 2.4 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」に関する研究
 - 2.4.1 文脈に着目したもの
 - 2.4.1.1 工藤（1996）

2.4.1.2 尾崎 (2000)

2.4.2 動詞の語彙的性質に着目したもの

2.5 先行研究のまとめと問題点

2.5.1 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の意味特徴に関して

2.5.2 否定のアスペクト形式の特徴と肯定形式との異なりに関して

2.6 本研究の課題

2.7 課題と章立て

第3章 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の意味記述の検討

3.1 シナイの「未完了」についての考察

3.1.1 文脈的条件について

3.1.1.1 「各時点での直接観察」について

3.1.1.2 「期待」について

3.1.1.2.1 「期待」という記述の再検討

3.1.1.2.2 「想定」のタイプ—「推論タイプ」と「願望タイプ」—

3.1.1.2 シナイが「未完了」を表す文脈的条件

3.1.2 動詞の語彙的性質の関わりについて

3.1.3 まとめ

3.2 シテイナイの未完了についての考察

3.2.1 「現在一点のみ」を捉えるについて

3.2.2 「期待度の強さ」について

3.3 意味記述の検討

3.3.1 本研究の視点

3.3.2 シナイの「未完了」における「前提」の制限

3.3.3 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の前提内容の異なり

3.3.4 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の意味

3.4 第3章のまとめ

第4章 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の使用文脈

- 4.1 はじめに
- 4.2 記述の方針
- 4.3 シナイの「未完了」の使用文脈
 - 4.3.1 問題の所在
 - 4.3.2 「想定」に基づく」という意味特徴について
 - 4.3.2.1 記述方法
 - 4.3.2.2 「想定」に基づくことによる伝達効果
 - 4.3.3 「把握」という意味特徴について
- 4.4 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」が使い分けられる場合
 - 4.4.1 シテイナイの未完了のみ使用可能な場合
 - 4.4.2 シナイの「未完了」のみ使用可能な場合
 - 4.4.3 使用する形式によってニュアンスが異なる場合
- 4.5 日本語教育におけるシテイナイの未完了とシナイの「未完了」
 - 4.5.1 シテイナイとシナイを使い分けるために留意すべき点とは
 - 4.5.2 留意点のまとめ
- 4.6 第4章のまとめ

第5章 否定のアスペクト形式の特徴—肯定形式との比較から—

- 5.1 シテイルとシテイナイの未完了
 - 5.1.1 肯定形式シテイルについて
 - 5.1.2 シテイナイとの比較を通じた継続相シテイルの本質的意味
- 5.2 スルとシナイの「未完了」
 - 5.2.1 肯定形式スルについて
 - 5.2.1.1 問題の所在
 - 5.2.1.2 スルの「限界達成」における“話し手の事態への捉え方”
 - 5.2.1.2.1 実現済みになると確定視している場合

- 5.2.1.2.2 実現済みになることを望ましく思う場合
- 5.2.1.2.3 スルにおける「限界達成」と「可能」の意味の関係
- 5.2.1.3 スルの「限界達成」における「把握」
- 5.2.1.4 シナイの用法に見られる「時間の幅」
- 5.2.1.5 まとめ

5.2.2 シナイとの比較を通じた完成相スルの特徴

5.3 否定のアスペクト形式の特異性

5.4 第5章のまとめ

第6章 完了・未完了の非対称性について

6.1 問題の所在

6.2 シタの意味に関する先行研究

6.2.1 二義説の見解

6.2.1.1 寺村 (1984)

6.2.1.2 工藤 (1995)

6.2.2 完了説の見解

6.2.3 過去説の見解

6.2.3.1 鈴木 (1979)

6.2.3.2 井上 (2001)

6.2.4 ムード説の見解

6.2.5 大木 (2017) の見解

6.3 シタの意味についての考察

6.3.1 完了の意味について

6.3.1.1 完了の意味が表れる条件

6.3.1.2 完成相スルとの関連性

6.3.2 過去の意味について

6.4 否定形式シナカタについて

6.5 完了・未完了の非対称性について

6.6 第6章のまとめ

第7章 終章

7.1 結論

7.2 本研究の意義

7.2.1 アスペクト研究における意義

7.2.2 否定研究における意義

7.3 今後の課題

参考文献

用例出典

Ⅲ. 論文要旨

第1章 序論

日本語のアスペクト研究は、戦後から現在に至るまで活発に議論が行われてきた（奥田 1977；森山 1984；高橋 1985；工藤 1995；須田 2010；庵・田川(編)2019 他）が、その多くは肯定形式について扱っており、否定形式を主として扱ったものは限られている。肯定形式と否定形式とは形式の上では表裏一体の関係にあるが、文脈上ではしばしば両者は非対称的であり、また、否定形式にしか見られない特徴があることも指摘されている（Akimova1992；工藤 1996 他）。アスペクトに関しても肯定と否定が非対称的であるということが指摘されており、アスペクトに関わる問題として、現在完了と未完了（以下、完了・未完了とする）の非対称性の問題があげられる。

(1) (2) を見られたい。日本語において、発話時における事態の開始限界達成もしくは終了限界達成、すなわち完了はシタもしくはシテイルで表される。一方で、発話時における事態の開始限界未達成また終了限界未達成、すなわち未完了は、基本的にシテイナイで表され、シナカッタで表すことはできない。さらに、否定においては、スルの否定形式であるシナイが発話時における開始限界未達成、または終了限界未達成を問題にする場合に使用されることがある（以下、このようなシナイを便宜上“シナイの「未完了」”と呼ぶ）。

(1) (飲み会の開始 15 分前、幹事達が出席を確認している)

「えーっと、田中はもう来たか？」

< 完了 > 「うん、{来た / 来てる} よ。」

< 未完了 > 「いや、{*来なかった / 来てない / 来ない} な。」

(2) (ペットのうさぎの調子が悪く、ご飯を食べるかどうか心配している)

「どう？うさびーご飯食べた？」

< 完了 > 「うん、食べた。」

< 未完了 > 「いや、{*食べなかった / 食べてない / 食べない}。」

このように、完了・未完了においては、肯定形式シタが完了を表すのに対して否定形式シナカッタが未完了を表さないという表される意味のズレ、また、特定の条件下において、スルの否定形式シナイが、発話時における開始限界未達成または終了限界未達成、すなわち「未完了」を表すというズレが見られ、肯定形式と否定形式とが非対称的になっている。では、なぜこのような非対称性が生じるのであろうか。

さらに、アスペクト体系においては、シナイが「未完了」を表すという特異性により、対応する肯定のアスペクト形式においては対立するとは予測できないシナイとシテイナイの意味の対立が生じ、また文脈によっては両形式が使い分けられる。以下 (3) では、シナイの「未完了」の使用が好ましい一方で、(4) の場合は、シテイナイの未完了を使用するのが自然であるように思わ

れる。

(3) (自分の家の花壇の世話をしながら不満気に)

「もう5月なのにチューリップがまだ {咲かない / ?咲いていない}。」

(4) (旅行でオランダのチューリップを見に来て)

「もう5月なのにチューリップがまだ {咲いていない / ??咲かない}。」

否定においてのみ対立する、シテイナイの未完了とシナイの「未完了」とは、それぞれがどのようなアスペクト的意味特徴をもち、使い分けられるのであろうか。

本研究では、以上のような完了・未完了を表す形式の非対称性に着目し、否定のアスペクト形式がどのような特徴をもつのか、また、肯定形式と否定形式とで肯否にとどまらない違いがあるのであれば、どのような違いがあるのかを考察することを目的とする。具体的には次のようなことを行う。

【研究目的1】 否定のアスペクト形式であるシナイの「未完了」とシテイナイの未完了の意味特徴を記述する

【研究目的2】 否定のアスペクト形式はどのような特徴をもつのか、また、肯定形式の場合とどのような違いがあるのかを考察する

【研究目的3】 完了・未完了における肯否の非対称性がなぜ生じるのかについて検討する

第2章 先行研究

第2章では、先行研究を、日本語のテンス・アスペクト体系 (=2.1)、アスペクトに関する研究 (=2.2)、否定に関する研究 (=2.3)、そして、シナイの「未完了」とシテイナイの未完了に関する研究 (=2.4) とに分類し、取り上げた。

2.1 では、日本語のテンス・アスペクト体系を概観し、日本語ではアスペクト・テンス・またモードが形態論的に絡みあっており、特にスル・シタにおいては、本質的な意味、すなわち、その形式の意味用法すべての根底にある意味が何なのかということ、また、それぞれの意味用法がどのような関係になっているのかが明らかでないという問題があることを指摘した。本研究の考察は、スル・シタの意味用法の関係の一端を明らかにすることに繋がる。

2.2 のアスペクトに関する研究においては、先行研究を踏まえ、次のことを指摘した。

- ・ シテイルの本質的な意味を何とするかについては一致した見解が得られていないこと
- ・ スル・シタは、アスペクト的意味に限っても、意味用法同士の関係が明らかでないこと
- ・ 日本語で Perfective を表す形式である完成相 (スル・シタ) は、限界概念の優位性が低いことが指摘されている (影山 2002; 金子 2022 他) が、そのような完成相 (スル・シタ) において、どのような場合に「開始限界達成/終了限界達成」という限界点に焦点化した意味を表すのかが明らかでないこと

その上で、アスペクト研究における本研究の位置づけを次のように述べた。

- ・ 否定形式シテイナイにも目を向け、完成相の否定形式シナイと比較しながら考察を行うことで、肯定形式シテイルだけでは見えてこなかった継続相の意味特徴を記述できる
- ・ 限界概念の優位性が低い日本語の完成相（スル・シタ）が、どのような場合に「開始限界達成/終了限界達成」という限界点に焦点化した意味を表すのかを解明することに繋がる

2.3 では、肯否の非対称性に関わる先行研究を取り上げ、本研究の考察は、肯定形式と否定形式とが意味論上非対称的か否かという問題の解明に繋がることを述べた。

そして、2.4 では、シテイナイの未完了とシナイの「未完了」に関する先行研究を文脈に着目したもの（工藤 1996, 尾崎 2000）と動詞の語彙的性質に着目したもの（日高 1995）に分けて見た。

以上の先行研究を踏まえて、本研究では3つの研究課題を設定した。

まず、【研究目的1】であるシテイナイの未完了とシナイの「未完了」の意味記述に関して、先行研究では、次のような問題点が見られる。

- ・ 工藤（1996）と尾崎（2000）は、シナイが「未完了」を表す文脈を的確に捉えられていない
- ・ 日高（1995）であげられている動詞は、語彙的性質ではなく、文脈の関わりによって「未完了」を表している可能性があるため、文脈の関わりがなくとも「未完了」を表しうるのかを検証する必要がある
- ・ 工藤（1996）と尾崎（2000）の観点では、シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の違いを的確かつ包括的に捉えられない

以上を踏まえ、以下を【課題1】とした。

【課題1】 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の意味特徴を的確かつ包括的に捉えられる記述を再検討する（第3章・第4章）

また、【研究目的2】に関しては、工藤（1996）が、否定のアスペクト形式の特徴について考察を行っている。しかし、同論文では否定形式特有の特徴なのか、あるいは対応する肯定形式にも見られる特徴なのかが曖昧であるため、それを踏まえて【課題2】を設定した。

【課題2】 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」を対応する肯定形式と比較しながら考察し、その特徴が肯定形式の特徴に起因するのか、あるいは、否定形式特有のものなのかを明確にした上で、否定形式のアスペクトがどのようなものを明らかにする（第5章）

さらに、完了・未完了の非対称性がなぜ生じるのかを検討するため、【課題3】を設定した。

【課題3】 否定形式のアスペクトの特徴、また否定形式の特異性を踏まえ、完了・未完了における非対称性がなぜ生じるのかを検討する（第6章）

第3章 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の意味記述の検討

第3章では、①シナイが「未完了」を表す条件、また、②シテイナイの未完了の意味特徴について再検討を行い、その上で、③シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の意味を記述した。

① シナイが「未完了」を表す条件について

シナイが「未完了」を表す条件については、尾崎（2000）の「各時点での直接観察」、また、工藤（1996）の「実現済みへの期待」という文脈的特徴を捉え直し、次のように規定した。

- I. 当該事態が実現済みになるかどうか話し手が以前から把握する（している）こと
（以下、「把握」とする）
- II. 把握する当該事態が実現済みになっているという想定のもとで話し手が述べていること
（以下、「想定」に基づく」とする）

条件IIに関しては、シナイの「未完了」に、実現済みへの望ましさが実現済みになっているという想定に置き換わった「願望タイプ」(= (5)) と、状況から推論して、実現済みになっているという想定を帰結としてもつ「推論タイプ」(= (6)) という質的に異なるタイプがあることを明らかにした。また、「推論タイプ」の場合には、実現済みだと望んでいる（期待している）か否かを問題にしないという特徴をもつことを指摘した。

(5) (友人AとBが、よく休載するBの好きな漫画について話をしている)

A「そういえば、君の好きなあの漫画、あれからどうなったの？」

B「それが作者が病気になったとかでまた休載中なんだ。早く新刊が読みたいんだけど、まだ{出なくて / 出てなくて}。」

(6) (久しぶりに故郷に帰り)

「前に帰省した時から随分経つが、{変わらない / 変わってない}な。」

なお、日高（1995）では、動詞の語彙的性質によってシナイが「未完了」を表すとされているが、シナイが「未完了」を表すためには上記の文脈的条件が決め手となる。本研究では、動詞の語彙的性質は、「未完了」の意味解釈の成立には重要でなく、終了限界未達成を捉えられるか否かという「捉えられる局面」に重要な役割を果たすものとして結論づけた。

② シテイナイの未完了の意味特徴について

シテイナイの未完了に関しては、尾崎（2000）で「現在一点のみを捉える」と捉えられていた特徴、また、工藤（1996）で「期待度の強さ」として捉えられていた特徴について再検討を行い、次のように捉え直した。

- I. 単純に発話時に事態がすでに実現済みであるという結果が見られるか否かを問題にし、

そのような結果が発話時に見られないことを述べる

Ⅱ. シテイナイの未完了は話し手の想定が否定される場合か否かに関わらず使用できる

③ シナイの「未完了」とシテイナイの未完了の意味記述

本研究では、否定文は肯定を前提とし、それを否定するために用いられる（Givón1978；太田1980；日本語記述文法研究会（編）2007 他）という否定の特性を踏まえ、「前提」という観点からシテイナイの未完了とシナイの「未完了」の意味特徴を以下のように記述した。

・シテイナイの未完了：

発話時に事態がすでに実現済みという結果があるという前提に対し、
発話時にそのような結果が見られないことを述べる

・シナイの「未完了」：

事態が未実現から実現済みになっているという話し手の想定に反して、
把握する中で話し手の想定が外れ続けていることを述べる

第4章 シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の使用文脈

第4章では、第3章で検討したシテイナイの未完了とシナイの「未完了」の意味特徴が、文脈の中でどのように表れ、またどのように使い分けられるのかを見、具体的な文脈の中での否定のアスペクト形式の使われ方について検討を行った。具体的には、まず、意味特徴の表れ方が多様であるシナイの「未完了」の意味特徴の表れ方について考察を行い、その上で、両形式が使い分けられる場合にどのような場合があるのかを整理した。

① シナイの「未完了」の使用文脈について

シナイの「未完了」の「「想定」に基づく」という意味特徴については、①基づく「想定」の種類、②「想定」への話し手の態度という観点から図1のように分類し、また、「想定」に基づいて述べることによって生じる効果を、【伝達効果】として整理した。

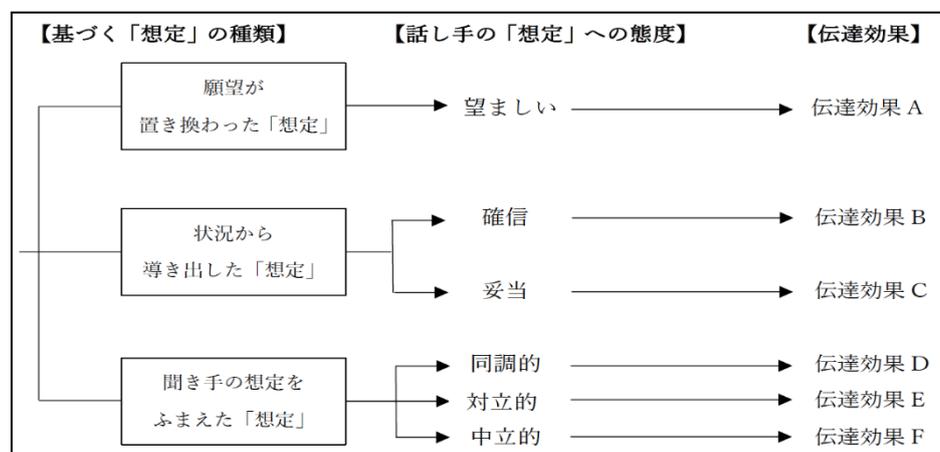


図1 シナイの「未完了」における「想定」とその伝達効果

以下は、図1の分類方法に基づき、整理した「想定に基づく」ことによる伝達効果である。

- ・伝達効果A：事態が望み通りにいかないことへのもどかしさを表出する
- ・伝達効果B：通常求められる状況と異なることへの意外性を表出する
- ・伝達効果C：通常求められる状況と異なることへの非妥当性を唱える
- ・伝達効果D：聞き手の想定に共感しながら事態が想定と異なることを述べる
- ・伝達効果E：現実の状況に基づき聞き手の想定が妥当でないことを指摘する
- ・伝達効果F：聞き手の想定と異なる意外な事態が続いていることを述べる

また、「把握」という意味特徴については、「以前から発話時まで変わらず実現済みでないという途中経過を話し手が確認しているか否か」によって次のように整理した。

- ・以前から発話時まで実現済みでないという途中経過を確認している場合：
→「実現済みになるか否かを気にかけてながら待ち受けている」というニュアンス
- ・以前から発話時まで実現済みでないという途中経過を確認していない場合：
→「自分が知らない間も以前と同じ状態が続いていた」というニュアンス

② シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の使い分けについて

本研究では、実例を、シテイナイの未完了のみ使用可能な場合、シナイの「未完了」のみ使用可能な場合、交替可能だがどちらの形式を使用するかでニュアンスが異なる場合、交替しても大きくニュアンスが変わらない場合の4つに分類し、どのような場合にシテイナイの未完了とシナイの「未完了」が使い分けられるのかを考察した。両形式の使い分けが必要なのは次の場合であった。

- ・シテイナイの未完了のみ使用可能な場合
 - ① 聞き手に事態が実現済みでないことを認識させる場合
 - ② 事態が実現済みでないことを推量して述べる場合
 - ③ 「想定」と現実が異なることに発話時に気づく場合
- ・シナイの「未完了」のみ使用可能な場合
 - ① 実現するか否か気にかけている最中である場合
 - ② 想定に反して今後も実現しそうにないことを述べる場合
- ・使用する形式によりニュアンスが異なる場合
 - イ) 以前から事態が実現済みでないことを確認している場合
 - ロ) 意志動詞の場合

第5章 否定のアスペクト形式の特徴-肯定形式との比較から-

第5章では、シテイナイの未完了とシナイの「未完了」を対応する肯定形式と比較し、①否定

のAspect形式の特徴，また，②否定のAspect形式の特異性について考察した。

① 否定のAspect形式の特徴

考察の結果，否定のAspect形式は，対応する肯定形式のAspect的意味を前提とし，両者は意味論的に対称的であることが明らかになった。シナイの未完了は肯定形式シテイルの「事態がすでに実現済みという結果がある」というAspect的意味を前提としており，また，シナイの「未完了」の場合は，スルが「限界達成」を表す場合の「事態が未実現から実現済みになる」というAspect的意味を前提としている。

さらに，シナイの「未完了」の場合は，スルが「限界達成」を表す場合と，“話し手の事態への捉え方”まで対応していることを指摘した。シナイが実現済みになっていることを話し手が認識上で確定視することで「限界未達成」を表す（＝「推論タイプ」）ように，スルも実現済みになることを話し手が確定視することによって「限界達成」を表す（＝(7)）。また，シナイが実現済みになっていることを話し手が望ましく思うことで「未完了」を表す（＝願望タイプ）ように，スルも実現済みになることを話し手が望ましく思うことで「限界達成」を表す（＝(8)）。

(7) (姑が家に来るといので掃除をしていたところ，姑のヒール音が近づき)

「大変！お母さんが来る！」

(8) 「(無くしていた鍵を見つけて) やった!これであそこのドアが開く！」

このことから，日本語の完成相スルは限界概念の優位性が低い，未実現から実現済みになることを確定視する/望むという“話し手の事態への捉え方”によって，開始限界あるいは終了限界への焦点化が起こり，その限界点への到達（達成）が表されるという特徴をもつことが示唆される。

② 否定のAspect形式の特異性

一方で，否定形式に特異な点も見られることも指摘した。第一に，シナイの「未完了」の場合，表される事態が幅的になりやすくなるという特異性をもつ。シナイの「未完了」もスルの「限界達成」も「未実現→実現済み」という事態の移行を問題にしたAspect的意味をもつが，否定形式シナイの場合，事態が発話時にも実現していないため，「以前未実現であった事態が相変わらず実現済みでない」ことを表し，表される事態が幅的になりやすくなる。

第二に，対応する肯定形式の意味が「前提」の上で生じるがゆえの特異性も見られる。一つは，シナイの「未完了」とスルの「限界達成」のテンスのズレである。スルの「限界達成」は，<未来>を表すが，スルの「限界達成」を前提とするシナイの「未完了」は，<現在>を表す。また，シナイの「未完了」もスルの「限界達成」も，そのAspect的意味が表れるためには，“確定視”，“望ましさ”という“話し手の事態への捉え方”が決め手となるが，シナイの「未完了」の場合，“話し手の事態への捉え方”が話し手の想定上で起こるため，“確定視”，“望ましさ”という質的

に異なる“話し手の事態への捉え方”が接近するという特異性も見られる。

第6章 完了・未完了の非対称性について

第6章では、シタの本質的な意味についての先行研究を概観した上で、シタの意味について考察した。また、以上で明らかにしてきた否定のアスペクト形式の特徴も踏まえて、完了・未完了における非対称性がなぜ生じるのかを総合的に検討した。

まず、本研究では、シタの本質的な意味を「話し手の認識上で基準時以前に事態が実現したことを表す」と規定した。また、シタにおける完了という意味が、「発話時に実現済みかどうかの問題になっている」という文脈の関わりによって生じる語用論的な意味であることを明らかにした。

完了・未完了の非対称性については、次のように結論づけた。まず、シタとシナカッタの意味の非対称性は、シタの本質的な意味が「話し手の認識上で基準時以前に事態が実現したこと」であり、完了という意味が語用論的な意味であることによるとした。また、特定の条件下でシナイが「未完了」を表すことについては、対応する肯定形式スルが「限界達成」を表すという特徴に起因する。一方で、否定形式の場合は、肯定形式の意味が前提上で表れるために、スルが「限界達成」を表す場合とのテンスのズレが生じ、肯定と否定とが非対称的になると結論づけた。

第7章 終章

本研究では、完了・未完了の非対称性に着目し、否定のアスペクト形式がどのような特徴をもつのか、また、肯定形式と否定形式との間にどのような違いが見られるのかを明らかにすることを目的とし、考察を行った。

アスペクト研究としての意義は、次のことがあげられる。まず、継続相シテイルについては、これまでその本質的な意味を何とするか見解が一致していなかったが、本研究では、「すでに実現済みという結果がある（ない）こと」とすることで、シテイルだけでなく否定形式シテイナイも含めて、的確かつ包括的に捉えられることを指摘した。また、完成相（スル・シタ）は、限界概念の優位性が弱いことが指摘されているが、スル/シナイが「未実現から実現済みになる（なっている）と確定視する/望む」という“話し手の事態への捉え方”が決め手となって「限界（未）達成」を表すこと、また、シタが「発話時に実現済みかどうかの問題になっている」場合に完了（＝限界達成）を表すことを明らかにした。

また、否定研究としての意義は、否定形式が肯定形式の意味を前提とし、両者が意味論上対称的であることが明確に示されたことである。

最後に、今後の課題を2点述べる。まず一つは、なぜシナカッタが未完了（＝「限界未達成」）を表しえないのかを明らかにすることである。これについて考察を行うことで、日本語における Perfective の特徴ないしは、日本語の否定形式のもつ Perfective の特徴を明確に記述できると考えられる。また、今後は、完了を表すシテイル（継続相）とシタ（完成相）についても扱い、

シテイナイの未完了（継続相）とシナイの「未完了」の場合の使われ方と比較を行うことで、否定のアスペクト形式特有の特徴をより明確に記述できるのではないかと考えられる。

引用文献

- 庵 功雄・田川拓海編（2019）『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 第1巻－「する」の世界－』ひつじ書房。
- 太田 朗（1980）『否定の意味』大修館書店。
- 奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって－金田一的段階－」『教育国文』8，宮城教育大学（奥田 1985 所収）。
- 奥田靖雄（1985）『ことばの研究・序説』むぎ書房。
- 尾崎奈津（2000）「シナイの〈現在〉用法をめぐって－シテイナイとの比較から－」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』10（1），pp. 41-55，岡山大学大学院文化科学研究科。
- 影山太郎（2002）『ケジメのない日本語』岩波書店。
- 金子百合子（2022）『「限界」志向のロシア語と「安定」志向の日本語：アスペクト表現のロシア語・日本語対照研究』ひつじ書房。
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房。
- 工藤真由美（1996）「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」言語学研究会編『ことばの科学』7，pp. 81-136，むぎ書房。
- 須田義治（2010）『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房。
- 高橋太郎（1985）『現代日本語のアスペクトとテンス』秀英出版。
- 日本語記述文法研究会編（2007）『現代日本語文法3 アスペクト・テンス・肯否』くろしお出版。
- 森山卓郎（1984）「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』3，pp. 70-83，明治書院。
- 日高水穂（1995）「「マダ～シナイ」と「マダ～シテイナイ」－未実現相の否定表現－」，宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）』pp. 151-158，くろしお出版。
- Akimova, T. 1992. "The perfective aspect and negation in Russian." In *Russian linguistics*, 23-51.
- Givón, T. 1978. "Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology." In Cole, Peter(ed.), *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*. 69-112. New York: Academic Press.